

平成21年 5月27日現在

研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19402021
 研究課題名（和文） ジェームズ・ステュアートの未発表草稿（経済学準備草稿）の解読とデータ化
 研究課題名（英文） Research on Sir James Steuart's Manuscripts: Sir James' Observations on Voltaire, Davenant, and Cardinal Richelieu.
 研究代表者
 古谷 豊（FURUYA YUTAKA）
 東北大学・大学院経済学研究科・准教授
 研究者番号：00374885

研究成果の概要：十八世紀後半の、経済学の成立過程に関わる重要草稿を解明し、経済学史研究の基本資料として編纂した。アダム・スミスより一足先に経済学を個別科学として体系化したジェームズ・ステュアートはその草稿の研究が未開拓であったが、本研究はステュアートが『経済学原理』を執筆する過程でノートを作成していたことを突き止め、その「経済学・註解ノート」ともいえるべき国際的にも未解明の重要草稿を初めて明らかにするものとなった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	6,500,000	1,950,000	8,450,000
2008年度	4,700,000	1,410,000	6,110,000
年度			
年度			
年度			
総計	11,200,000	3,360,000	14,560,000

研究分野：社会科学A

科研費の分科・細目：経済学説・経済思想

キーワード：ステュアート、ヴォルテール、ダヴナント、リシュリユー、草稿研究、経済学史

1. 研究開始当初の背景

(1) ジェームズ・ステュアート(Sir James Steuart, 1713-1780)は英語圏で初めて「経済学」(Political Economy)を冠した著作『経済学原理』(1767)を刊行し、その9年後のアダム・スミス『国富論』(1776)にも多大な影響を与えた主要な経済学者のひとりである。

とりわけその貨幣論は同時代のなかでも極めて独創的かつ秀でており、近年国の内外においてもステュアートの経済理論は貨幣的経済理論の最初の体系化を果たしたものとして位置づけられつつ研究がとみに盛んになっている。

(2) しかしながらステュアート研究にとってこれまで、その膨大な草稿群が未解読のまま残されている点が障害になっていた。時代を画す学説において、その学説の解明並びにその学説の成立過程の解明のために草稿資料の研究は重要な役割を占めている。

ステュアートの場合は諸般の事情から草稿類が近年までその家系のもとに私蔵されてきておりアクセスが極めて限定されていた。1988年にステュアートの母校エジンバラ大学の図書館に寄贈されることでようやく本格的な草稿研究の条件が整うこととな

った。

(3) 研究代表者の古谷と研究分担者の奥山は平成 12 年より、エジンバラ大学ラザフォード教授の協力のもとステュアートの草稿の解説を推し進めてきた。

その過程で奥山は平成 16 年にステュアートの未刊行重要論考 *Letter To my Lord Barrington Upon the Principles and Doctrine of Money Applied to the present circumstances of The Nation* を『ジェームズ・ステュアートの貨幣論草稿』(社会評論社)として刊行し、さらに平成 18 年 11 月には奥山と古谷でステュアートの『経済学原理』の信用論部分の草稿を『ジェームズ・ステュアート『経済学原理』草稿—第 3 編 貨幣と信用—』(お茶の水書房)として刊行する。

この、18 世紀の手書き草稿の解説・研究という技能集約的な作業において、現在、実質的に奥山と古谷がステュアートの草稿研究の中心となっており、国際的にもほとんど未開拓の研究領域を切り開いてきた。

(4) これまでのステュアート草稿研究を通して、古谷と奥山は *Coltness Papers MS notes and correspondence. MS 2291-2295* に含まれる *Sir James Steuart Denham. Commonplace book.* が極めて重要な草稿であり速やかな解明が求められるものであることを明らかにしていた。

2. 研究の目的

本研究は研究期間 (2007~2008 年度) の二年間で *Sir James Steuart Denham. Commonplace book.* に含まれる以下の 3 点の論考/標注を解説・研究し、その資料の性質を明らかにするとともに経済学史研究の基本資料として編纂することが目的である。

- *Notes and Observations on the political testament of Cardinal de Richelieu.*
- *Answers to Voltaire's objections against the authenticity of the Cardinal de Richelieu's testament.*
- *Observations on Davenants writings.*

本研究で扱う草稿はこれまで明らかにされてきたことのない、ステュアートの『経済学原理』形成途上の準備草稿である。ステュアートは経済学を初めて明示的に独立した一つの「正規の科学」として体系化した。最初の経済学体系が構想されるに至るこの過程はヨーロッパの主要国の詳細な検討を通して成されたものであった。そのことは『経済学原理』のなかで幅広い国際的視野・歴史的視野として現れているが、本研究で明らかにされる草稿はステュアートのこの各国経済の検討過程の論考/標柱である。

3. 研究の方法

- (1) マイクロフィルムによる下読み
- (2) 関連文献の収集
- (3) 現地で実物草稿資料の解説・研究
- (4) 関連する草稿の研究

250 年以上の時を経た手書き草稿の正確な解説には、現地での実物草稿の研究が不可欠である。加えて資料の性質を明らかにするためには書簡草稿等幅広い草稿資料を探索・研究する必要がある

- National Library of Scotland,
 - National Archives of Scotland,
 - British Library,
 - National Archives (Kew),
 - Glasgow University Library,
 - The Mitchell Library,
 - Scottish Catholic Archives,
 - Scottish Borders Archive,
 - Perth & Kinross Council Archive,
 - Tubingen University Library
- 等の機関で研究にあたった。

4. 研究成果

(1) 経済学の成立に重要な役割を果たしたジェームズ・ステュアートの経済学体系に関わる重要草稿を解明し、経済学史研究の基本資料として編纂した。

(2) 本草稿がステュアートが『経済学原理』を執筆するために作成した準備ノートであることを明らかにした。ステュアートは『経済学原理』全五編の最初の二編の初稿を 1759 年に仕上げ、その後 ①本草稿は 1760 年に南ドイツの大学都市チュービンゲンにて、『経済学原理』第三編の執筆と並行して作成された。②さらに 1762 年末に母国ブリテンに帰国して、1765 年に『経済学原理』第五編の執筆と同時期に本草稿の文章を検討し加筆修正した。

(3) 本草稿はまたステュアートとヴォルテールが同じ論点についてそれぞれどのような議論を展開するかについての興味深い例を提示することとなった。

ルイ 13 世の名宰相であった *Armand Jean du Plessis, Duc de Richelieu (1585-1642)* のものとされる *Testament Politique* については、永らくその真偽について見解が分かれていた。そのなかでもヴォルテール (*François-Marie Arouet, Voltaire, 1694-1778*) の「偽作である」という主張が、広く受け容れられてきた。本研究で取り扱った '*Answers to Voltaire's objections against the authenticity of the Cardinal de Richelieu's testament*' は、ヴォルテールのこの主張に対するステュアートの反論であった。

故に本草稿は、従来は一切資料がなかった、ステュアートとヴォルテールとの関わりを指し示す初めての資料となった。

そのうえ議論は真っ向から対立する。ヴォルテールは *Testament Politique* の“偽の”作者を an ignorant liar (無知な嘘つき者) と罵って次のように結論づける。"Were it necessary to confute all the mistakes with which this performance swarms, I should make a volume as large as the Political Testament, a work which knavery has compiled; which ignorance, prepossession, and respect for a great name, have caused to be admired; which the patience of the reader can scarce endure to read; and which had remained absolutely unknown, had it appeared under the name of its real author." 対するステュアートは、ヴォルテールのあげる論拠を一つ一つ吟味してそれらに根拠がないことを示し、むしろ *Testament Politique* の文章は当時の政治の泰斗でなければ書けない内容であるとして以下の結論にたどり着く。

"As I observed at the beginning, the whole is a matter of conjecture, but I think the probability lies in favour of the *Testament*, notwithstanding all Voltaires objections."

例えばヴォルテールは *Testament* のなかで、女王付きの Fargis 侯爵夫人が敬称抜きで単に "Fargis" と記されていることを指摘してこの文章はリシュリューのものではあり得ないとする。「*Testament* はリシュリューが国王に献ずるはずのものであるにもかかわらず、この例は文章を実際に書いた人間の育ちの卑しき、国王への敬意の欠如を露わにしている」。

ステュアートはこれに対して「なんたるお粗末な批判！」として次のように説明する。国王に申し上げる際には誰についてであれ Monsieur や Mademoiselle は使われないのが常であり、議会もちょうどこの *Testament* と同じ様式で呼ぶ、とする。

ヴォルテールはまた "The ninth chapter of the *Testament Politique* bears in each page of it the most evident proofs of a forgery, the most wretchedly executed that can be imagined; here reflections, facts, computations, and every thing else, is equally false" と口を極めて罵る。そこでは国王の収入が年 3,500 億リーヴルであるとされているのに、後の箇所では毎年戦費に 6,000 億リーヴルかかった、とつじつまの合わない数字が書いてある、これらは偽の作者が様々な文献の数字をよく理解しないまま作文したから生じたミスである、と。

ステュアートの議論はここでも正反対で

ある。ステュアートは「恐れながら、ヴォルテールは *Testament* の第九章が理解できていないからこのように書いているのだろう」とし、逆にステュアートは他のどの章よりも第九章こそが、この *Testament* が偽作ではなくてリシュリューの本物であることを示しているのだ、とする。

ヴォルテールの指摘する 3,500 億と 6,000 億との矛盾については、これはヴォルテールがリシュリューの *épargne* という用語を理解していない故のヴォルテールの誤解であり、何ら前後で撞着する説明にはなっていないという。すなわちリシュリューの説明ではこの 3,500 億は総歳入 8,000 億から負債の利子支払い 4,500 億を差し引いた金額となっている。他方で 6,000 億とは 5 年間の戦争中に毎年借り入れた金額のことである。当時の利子率に従えば負債総額 3 兆 (6,000 億×5 年) の利払い額はちょうど 4,500 億になることがなよりの証明である、と。

"But, Voltaire, I suppose, not attending to the proper signification of the word *Epargne* at this time to wit *Tresor royal* understands by that term an annual saving, that is to say, he suppose, that the king having no debts put 35 millions yearly into his coffers, to augment his treasure[.] shameful ignorance of the meaning of a word in his own language." (下線引用者)

もとよりこの時点ではヴォルテールもステュアートも *Testament* の真偽については何ら証拠を持ち合わせていない。偽作であるか本物であるかを判断するのはひとえにそれぞれの政治に関する見識、経済に関する見識である。ヴォルテールはそこを旗幟鮮明に「偽作である」と主張し、他方でステュアートはこちらもまた明確に「本物である」とした。

"This [...], and the whole reasoning of the Cardinal upon to the methods of paying them (which is as good as sir Robert Walpole could have wrote) proves to me to the clearest conviction, that this chapter, at least, has been pen'd by a master in that art. [...] whatever has called my attention, proves to me the authenticity of it; both from the mistaken notions of the Cardinal as to several things, and the perspicuity of his ideas upon others."

このように述べて、*Testament* の第九章の議論はイギリスでいうと 18 世紀前半の大政治家ウォルポールであって初めて書けるほどの高い水準のものであり、大政治家リシュリューの筆になるものである可能性が高いと主張する。

さらに興味深いことは、草稿には後日の加筆があり、そこではステュアートがさらにフ

ランス文献の渉獵を行った結果、パリの Kings Library で発掘された草稿の内容から *Testament* が真作であることを証明している。

一般的にはこの *Testament Politique* の真偽については、永らくヴォルテールの見解に従う形で偽作であるとされ、ようやく 1880 年になって Hanotaux 等により本物であることが明らかにされたとされている。本草稿はその 120 年も前にステュアートが極めて説得的にヴォルテールの見解を覆して本物であることを論じていたことを示すこととなった。

それ以上に重要な成果は、この草稿が当時のヨーロッパの知識人世界のなかでステュアートの政治並びに経済に関する知見がどの水準にあるかを如実に示すこととなったてんである。

ヴォルテールはいうまでもなくフランス啓蒙主義の“無冠の帝王”で第一人者であった。真偽の分からないリシュリューの文章を、それぞれの政治的・経済的見識から判断し真偽を競い合ったこの件は、結果としてステュアートの類い希なる見識の高さをくっきりと浮かび上がらせている。上で瞥見した例だけでも、政治的文書の実情についての知識、各国の財政・金融についての知識はヴォルテールの数段上を行く。

ヴォルテールが *Testament* の第九章を出鱈目ばかりだとして "It will, no doubt, be asked, how it was possible the public should have passed such an affront on the memory of cardinal de Richelieu, as to imagine this book worthy of him? I answer, men seldom reflect; read with very little attention; judge with precipitation, and receive opinions as they do money, because they are current." と切って捨てたものを、ステュアートは *Testament* の議論の内容からこれはウォルポールやリシュリューのような傑出した政治家でないといけない内容であることを読み取って、"to me the book is a Treasure; in so far as it points out the sentiments of politicians at that time: and I judge of the authenticity of those sentiments according as they serve to clear up circumstances, which confirm one another" と言い切るまでの能力があった。

ステュアートには実は学者としての顔以外にもう一つの顔があった。この草稿が書かれた 15 年前の 1745 年 10 月、ジャコバイトの乱を引き起こした若僭称王（ボニー・プリンス・チャールズ）はフランスの援助を引き出すためにステュアートを送り出し、パリとベルサイユでフランス国王ルイ 16 世並びにその大臣たちとの交渉にあたらせたのであった。この人選は、今回の草稿を見る限りま

ことに当を得たものであったということができよう。

(4) ステュアートがダヴナントおよびリシュリューから如何に継承し摂取したかが具体的に明かされた。

『経済学原理』においてもこの草稿で展開された内容は第 4 編「信用と負債について」第 4 部「公信用について」の第 3、4 章で部分的に述べられている。第 3 章「先借り、つまり元本と利子との支払いのかわりに租税を割り当てて貨幣を借りることについて、およびこの主題に関するダヴナント博士の見解について」では「ここで自国に戻って、ダヴナント博士によって形成された公信用の観念を説明しよう。彼は 1688 年の革命の頃に活躍したが、当時をイングランドにおける公信用の草創期と考えてもさしつかえない。／私がその著作を読んだことのある当時の人のなかで、ダヴナントほどこうした事柄に精通していたと思われる人物はいない。彼は博識家であるばかりか理論家でもあった。彼はほとんどの人がもたないような機会にめぐまれて、理論についても事実についても十分に通じており、母国の利益の促進にもっともよく裨益するように彼の才能を傾けた。彼は政治的問題について多くの小冊子を書いたが、それを注意深く読んで、それ以後の経験が教えることと照合すれば、それはこの研究の主題に関連する多くの問題に明晰な光を当てることになる。」と述べ、また第 4 章「ルイ 14 世の治世以前におけるフランスの公信用の状態、およびこの主題にかんする大リシュリューの見解について」では「公信用という主題にかんするダヴナントの意見を、彼の時代のイングランドの状態に見合ったものとして読者の前に提示したので、それをその競争国のもう 1 人の偉大な人物の意見と比較するのはおそらく有益であろう。私の言うのはリシュリュー枢機卿のことである。」と述べて主題の公信用の説明のために二人を用いている。

しかしながら本草稿が明らかにするところでは、ステュアートがダヴナントとリシュリューの議論で重点を置いているのは決して公信用に限定されるものではなかった。公信用並びに租税の増大が国家に及ぼす影響ということを出発点に、国家の経済流通の総体との関連で公信用・租税の拡張が分析され、いわば極めて国家経済学的な観点の議論が重視される。そのことはステュアートがリシュリューへの註解の冒頭に引用する（リシュリューの）文章に象徴的に表れている。

Gold and silver are the Tyrants of the world.

There ought to be a proportion between what the prince draws from his people and

what they can conveniently bear. It is pedant[r]ly to maintain that a prince has no right to draw money from his subjects; but that he ought to content him self with the possession of their hearts.

But none but flatterers (the pest of society) can maintain; that he may draw from them, justly, what ever he think fit; and that their right extends in this particular as far as their will.

草稿で示される国家経済学的な観点が注目を要するのは、それが単に題材（ダヴナントとリシュリユー）に引きずられてのことだけとも思えず、『経済学原理』執筆途上のステュアートの特異な背景と符合するからである。ステュアートは1757年6月から1761年6月にかけてチュービンゲンに滞在し『経済学原理』の執筆を続けた。七年戦争さなかのドイツの小領邦はそれぞれの国力の維持・増進のために官房学を発展させていった。ステュアートはそのようななかでチュービンゲン大学の教授たちと毎日自宅で議論を重ね、さらには宮廷から顧問に就くよう打診を受けていた。このような背景は当時の英国の学者としては極めて特異なものである。

つづめていえば①ステュアートは当時を代表する学者（ヴォルテール）でも理解できず吸収できなかったリシュリユーの政治論・経済論を自らの宝(treasure)として吸収し、②またステュアートは同時期に、当時の英国の学者としては稀なことにドイツ官房学との深い接触を持ちながら『経済学原理』を執筆した。

このようにして本草稿はステュアートが稀有な能力と背景に恵まれてダヴナント（およびウィリアム・ペティ）やリシュリユーの公信用論、租税論、国家経済学的議論を吸収した過程を明らかにし、如何にして同時代のヒュームやスミスとは極めて異なる経済理論を形成したのかについて大きな示唆を与えるものとなった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計2件）

- ① 古谷 豊 'Study on Sir James Steuart's Manuscripts', STOREP (イタリア経済学史学会) 若手研究者セミナー, 2008年8月23日 Brixen (Italy)
- ② 古谷 豊 'Construction of James Steuart's Monetary Theory', ESHET (ヨーロッパ経済学史学会) 12th Annual Conference, 2008年5月16日 Prague (Czech Republic)

〔その他〕

資料の重要性に鑑み、図書として広く国内外に発表できるよう現在準備中。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

古谷 豊 (FURUYA YUTAKA)

東北大学・大学院経済学研究科・准教授

研究者番号：00374885

(2) 研究分担者

奥山 忠信 (OKUYAMA TADANOBU)

埼玉学園大学・経営学部 経営学科・教授

研究者番号：40185559